



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	林善茂先生座談：アイヌ農耕研究を振り返って
Author(s)	谷本, 晃久
Description	記録と資料
Citation	北方人文研究, 7, 109-121
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55041
Type	other
File Information	jcnh07-07-TANIMOTO.pdf



〈記録と資料〉

林善茂先生座談 —アイヌ農耕文化研究を振り返って—

谷本 晃久（編）

北海道大学大学院文学研究科

「林善茂先生座談」によせて

以下に掲載するのは、2006年（平成18）8月21日におこなわれた、林善茂氏（1922～2013. 北海道大学名誉教授）による座談の記録である。出席者は林善茂氏ならびに令息の林淳氏（愛知学院大学教授）、木田歩氏（南山大学人類学博物館嘱託／現同人類学研究所非常勤研究員）ならびに谷本（北海道教育大学助教授／現北海道大学准教授）である。座談は、札幌市豊平区西岡にある林氏の御自宅で実施された。座談の記録の文章化は、谷本が行った。従って最終的な文責は、谷本が負うものである。

林氏は、『アイヌの農耕文化』（慶友社、1969年）の著者として知られる農業史を専攻した研究者で、長く北海道大学で教鞭を取った。座談でも触れられているように、北大予科から1941年に農学部農業経済学講座へ進み、同大学院特別研究生・助手・助教授を経て、53年に経済学部へ転じ教授・学部長を務めた、生粋の“北大農経”育ちの研究者である。学生時代から経済学部長時代にかけて自身の残された記録・文書については、北海道大学大学文書館に寄贈されており、「林善茂関係資料」として公開されている¹。

林氏は座談でも触れているように北方文化研究室（1937年に総長直属機関として設置）に「出入り」しており、1959年以降は同研究室の運営に委員として参与、機関誌『北方文化研究報告』に論文を7編発表している。同研究室が1966年に文学部ユーラシア文化研究室と合併し文学部附属北方文化研究施設に改組²されて以後も、研究員として機関誌『北方文化研究』（『ユーラシア文化研究』・『北方文化研究報告』の後継誌）に論文を2編発表している（付表1）。その期間は1958年から76年の約20年間に及んでおり、北海道大学をベースに長期に亘り北方研究を手がけた研究者のひとりとして位置付けることができる。つまり、この時期における北海道大学の“北方文化研究”の一翼を担った研究者の回顧談として、この座談は読むことができるということになる。

林氏によるこれらの成果を通観すると、座談でも触れられているように、綿密なフィールド調査とともに厳密な文献調査を実施し、それにより得られた素材を有機的に連関させた分析・立論を行なっているという印象を受ける。学術的評価についてはここでは立ち入らないが³、フィールド調査を軸足のひとつに置いたこうした手法による「伝統的なアイヌの生活」を対象とした研究は、座談でも繰り返し吐露されているように、林氏の印象では1960年代頃を境に次第に困難になっていくものと認識されている。むしろ、「伝統」の捉え方は一面的なものであってはならないが、林氏の認識もまた、事象

の一側面を表しているということができよう⁴。すなわち、この座談で示された林氏の印象は、1950～60年代に「全道の古老」を訪ね歩いた研究者の認識（調査者の向ける認識と、調査対象から受けた認識の双方）を示した貴重な記録として読むことが叶うテキストと考える。

さて、北方文化研究施設は1995年に廃止され、所属教官は文学部北方文化論講座に移行したが、機関誌は廃刊となった。本誌『北方人文研究』は、従って『北方文化研究』、延いては『北方文化研究報告』の後継誌とはいえないが、創刊にあたってはそれらの成果や学問的水準を強く意識した形跡が窺える⁵。その一方で、栗生澤猛夫氏は文学研究科長として本誌に寄せた創刊の辞のなかで、「これまでの北海道大学における、とりわけ戦前の北方研究には、必ずしもすべてを肯定し引き継ぐわけにはいかない側面」のあることを指摘し、「より普遍的な立場を求め、新たな地平を切り開きつつ、本誌を創り上げて行きたい」との展望を示している⁶。こうした発言の背景には、北方文化研究室に集った研究者の行なったアイヌ研究の持たざるを得なかった倫理的問題点が、1970年代以降厳しく指弾されてきたことがあるものといえる⁷。

林氏に関していえば、座談でも触れられているように、1977～78年に生じた、いわゆる「北海道大学差別講義糾弾闘争」の当事者として指弾された経歴を持つことは、座談を掲載するにあたって触れておかなければなるまい（座談註16・17参照）。大学の講義内容が指弾の対象となった点、大学構内を舞台に実力が行使された点（学生による8時間に及ぶ講義室ロックアウトと学部への要請を受けての警官隊による解除、ならびに大学構内における厳冬期の座り込み抗議行動）、指弾者と仲裁者がアイヌ民族であった点に注目が寄せられたこの事件は、指弾者・経済学部双方による総括はあるものの、その詳細に涉っての歴史的評価は現時点ではいまだ難しい。ここでは、指弾を受けた当事者の側の研究履歴や研究動機を示す記録としての価値がこの座談には認められることを指摘するに留めておきたい。

最後に、この記録の原稿を2009年8月に一読され、公けにすることを快く許可してくださった林善茂氏、ならびに令息の淳氏に、この場をお借りして心より感謝申し上げますとともに、谷本の不手際によりその公開が善茂氏の御生前に叶わなかったことにつき、深くお詫び申し上げる次第である。

¹ 井上高聡「林善茂関係資料」（『北海道大学大学文書館年報』5、2010年）参照。

² その際、北方文化研究室が管理していた古文書・古記録類については、附属図書館に北方資料室を設けて管理することとされ、現在に至っている。以下、北方文化研究室・北方文化研究施設の沿革については、高倉新一郎「北方文化研究室顛末」（『北大百年史』通説編、北海道大学、1982年）ならびに菊池俊彦「北大北方文化研究室・北方文化研究施設の北方研究」（『北大文学研究科公開シンポジウム「北方的：北方研究の構築と展開」報告書」北海道大学大学院文学研究科・文学部、2007年）参照。

³ 高倉新一郎氏は『北方文化研究報告』誌掲載の林論文を概観し、「元来狩猟民族であると規定されていたアイヌが和人とは異なる農業を知っていたことは古くから指摘されていたところであるが、それを詳細に調査して、実態を把握して体系づけ、比較農業史の一部として大きく貢献した」と評価している（高倉、注2前掲論文、973頁）。

⁴ たとえば1980年代以降の研究として、白沢ナベ氏（1905～93）を主なインフォーマントとした言語学からの成果に、中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』（草風館、1995年）や佐藤知己『アイヌ語文法の基礎』（大学書林、2008年）がある。また、織田ステノ氏（1901?～93）をインフォーマントとしたアイヌ語テキストに、静内町教育委員会編『静内地方の伝承：織田ステノの口承文芸』1～5（静内町郷土史研究会、1991～95年）もある。他方、林氏は織田氏をインフォーマントの一人とした食文化誌の成果につき、座談では「[昭和20～30年代の] 古老からの聞取りとは大きくかけ離れているという印象」を感じている（座談註12参照）。その当否についての判断はここでは措くが、こうした印象は、文化伝承における時代差を考える上でひとつの手掛かりとなり得るものと捉えられよう。

⁵ 栗生澤猛夫「創刊の辞」・津曲敏郎「創刊にあたって」（『北方人文研究』1、2008年）。

⁶ 栗生澤、注5前掲稿。

⁷ これらの問題点については、たとえば植木哲也『学問の暴力』（春風社、2008年）第5～6章の整理を参照。

林善茂先生座談 —アイヌ農耕文化研究を振り返って—

2006年8月21日 13:30～16:30

於：札幌市豊平区西岡、林善茂氏邸

出席者（敬称略、所属は座談当時）

林 善茂 （北海道大学名誉教授）

林 淳 （令息、愛知学院大学教授）

谷本 晃久 （北海道教育大学助教授）

木田 歩 （南山大学人類学博物館嘱託）

中島九郎先生

わたしは、小樽中学校¹を出て、北大の予科に入りました²。中学では歴史が好きでね、自慢じゃありませんが、試験ではいつも満点に近い成績でした。続けて勉強したい気もあったんだが、当時北大には歴史はおろか、文科系の講座はなくてね、農経〔農業経済学〕くらい。それで、大学は農学部に進んだんです。

中学時代の恩師に、『北海道略史』という本³を書いた近藤〔清吉〕という先生⁴がいてね、歴史がやりたければ北大農学部を高倉新一郎⁵という偉い先生がいる、と聞かされていました。どんな大家なのかと思っていたのですが、入ってみれば案外若い先生だったので、びっくりしたものです。いえ、よく誤解されているのですが、大学での恩師は高倉先生ではないんですよ。私が進学した当時、農経の中心におられたのは中島九郎教授⁶。わたしは中島先生の研究室に入ったわけです。かたちのうえでは、高倉先生は先輩にあたります。

中島先生には、本当にお世話になりました。昭和18年（1943）頃だったかな、徴兵で不足した研究者を補うため、特別研究生の制度ができて、私はそれに選ばれた⁷。月

¹ 北海道庁立小樽中学校。

² 1938年4月。北海道帝国大学予科農類。

³ 近藤清吉『郷土史としての北海道略史 稿本』（私家謄写版、1935年）。

⁴ 1890～1967。郷土史家、書家。号天山。北海道師範学校本科卒。利尻・礼文・宗谷地方の尋常小学校訓導を経て、文検合格後、小樽中学校教諭。戦後小樽高等学校教諭。回顧録に、近藤清吉先生回想誌刊行会編『天山近藤清吉回想誌』（柏葉書院、1969年）がある。

⁵ 1902～1990。農業経済史、北海道史。北海道帝国大学農学部卒。同助手、助教授、教授、のち経済学部長、附属図書館長を歴任。1937～52年北方文化研究室研究員、52～66年同委員。1966年退官後、北海学園大学学長、北海道開拓記念館長など。著書に『アイヌ政策史』、『北海道拓殖史』など。追悼録に、高倉新一郎著作集刊行会編『青嵐に昇華す：高倉新一郎追悼集』（北海道出版企画センター、1992年）がある。

⁶ 1886～1959。農政学、農業経済史。東北帝国大学農科大学卒。同大助手、北海道帝国大学助教授、教授。1948年退官後、札幌短期大学教授など。著書に『対米日支移民問題の解剖』、『佐藤信淵の思想』など。

⁷ 1943年10月。北海道帝国大学大学院特別研究生。研究テーマ「人口政策上ニ於ケル農業ノ地位ニ関スル研究」。

給 90 円、当時としては結構な額でした。そこで中島先生につかせてもらって、農村文化・農村人口に関する研究を手がけました。いや、特に北海道を対象としたテーマではなかったな。ところが、途中で腸チフスに罹ってしまいました。生死の境を彷徨うような大病です。で、退院して講座に戻ってみると、それまで進めていた研究内容がぜんぜん頭に入っていない。記憶がとんじやったような感じでした。それでも中島先生は、いろいろと励ましてくれましてね、昭和 20 年（1945）には助手に採用してくれた⁸。研究については勿論ですが、こうしたご配慮は忘れられません。助手時代に結婚したのですが、家内は中島先生の奥さんの姪御さん。こうしたご縁もあり、わたしにとっての恩師といえば、中島九郎先生なのです。

「いまならできる」

助手になった当初は、農業史をやろうと思って、日本の古代農業、とくに弥生農業をテーマに選びました。考古学の森本六爾さん⁹なんかの研究に刺激されたりしてね。そんな話をしていたら、高倉新一郎先生が、「いまならできる」というんだな。つまり、“原始農業”を研究するんだったら、アイヌの行っていた伝統的な農業から大きな示唆を得られるのではないかな。勿論、いくら当時だったって伝統的なアイヌの農業が行われていたわけではないのですが、古老といわれる人はまだそれを覚えている。古老からの聞き書きを素材に、“原始農業”を研究することが、「いまならできる」というわけです。

それでその気になって、「アイヌの原始農耕の復元」というテーマ¹⁰で文部省に昭和 27 年度の科学研究費の補助申請をしたら、採用されたんですね。中島先生の後押しもあったんでしょう。高倉先生への配分が 2 万円のところ、わたしには 3 万円だったのを覚えています。アイヌの農耕を専攻テーマに据えるようになったのは、この頃からです。

テーマに関するフィールド調査を重ねたのは、昭和 20～30 年代のことです。それこそ全道の古老を訪ね歩きました。高倉先生が、聞き取りの叶う古老のリストを見せてくれましてね、それを頼りに歩いたものでした。歩いていて感じたのは、明治 10 年代・20 年代を青壮年として経験した人でなければ、農耕を含めた伝統的なアイヌの生活はわからない、ということでした。北海道旧土人保護法による勸農政策の“成果”とでもいいましょうか、明治末年には生活が“日本人”化してしまっている人がほとんどになっていましたでしょう。そうしたこともあって、高倉先生が「いまならできる」と言ったことの意味は、実感できるものでした。おばあさんに育てられたという萱野茂くん¹¹のような例もあるのですが、昭和 30 年代は、伝統的なアイヌの生活をフィールド

⁸ 1945 年 11 月。北海道帝国大学農学部助手。

⁹ 1903～1936。考古学、弥生文化研究。在野の研究者として、弥生時代の農耕文化の存在を提唱。遺稿集に『日本農耕文化の起源』（葦牙書房、1941 年）がある。

¹⁰ このテーマの集大成として、林善茂『アイヌの農耕文化』（慶友社、1969 年）がある。

¹¹ 1926～2006。アイヌ語・アイヌ文化研究。萱野茂アイヌ記念館長、平取町議会議員、参議院議員などを歴任。著書に『ウエペケレ集大成』、『萱野茂のアイヌ語辞典』など。

で調査できる最後の機会だったと思います。最近農文協で『アイヌの食事』という本¹²をまとめたようですが、わたしに言わせれば、そこに書かれている叙述は和人のそれとそう変わらないものが多く、当時の古老からの聞き取りとは大きくかけ離れているという印象を拭えません。

ただ、調査中にただ一度だけ、まったく日本語の通じないおばあさんにめぐり合ったことがあります。昭和20年代のことです。日高地方だったかなあ、山奥の一軒家に一人で住んでおられた方でした。わたしはアイヌ語ができませんから、このときは聞き書きができませんで、困ったものです。アイヌ語だけの世界で暮らしている人が、昭和20年代には確かにいたんですね。でもそれは、ただ一度きりの特殊なケースでしたから、アイヌの生活の“日本人化”に関する私の印象は変わりませんでした。

北大農学部 of 学風

研究を進めていくにあたっては、徹底した文献調査と、綿密な現地調査の両輪で行くことを心掛けました。文献調査をろくにせずにフィールドへ入る人がいますが、それじゃダメですね。アイヌの農耕に関する文献は、北大附属図書館の北方資料室にずらっと揃っています。古い「蝦夷」の時代のもも含めてね。そしてそれをすべて把握している高倉先生が側にいるんですから、こんなに心強いことはない。もちろん私は農学者ですから、フィールド調査をより重視した研究スタイルをとりましたが、なにしろ失われつつある伝統農業を対象としたわけですから、やはり文献調査は欠かすことはできない。そうした意味で、当時の北大はとても恵まれた環境だったと思います。

高倉先生に限らず、農学部 of 同僚諸先生との間には、どんな疑問をぶつけても答えてくれる、という自由さがあったな。これは北大農学部 of のよき伝統だったと思いますね。だいたい北大農学部は、農学校時代からアメリカの学問を取り入れてきたくらいで、学問的水準は高いんだ。わたしのアイヌ農耕研究に取り柄があるとしたら、農具や耕耘技術の分析などに、“農学が入っている”というところかもしれません。農学部に戻ればこれらに関する水準の高い確実な知識がたやすく得られるのですから、分析には恵まれた環境だったというわけです。

私は農学部育ちですから、自分はいくまでも農学者である、という意識があります。高倉先生にも言ったんですよ、「僕は〔アイヌ研究に関しては〕農業以外はしません」ってね。先生は「いいよ」なんて笑ってましたっけ。ええ、私はアイヌの農耕ばかりを研究していたのではなく、八雲の徳川農場などを事例とした近代北海道における農場経営の研究¹³や、鯊漁場における農業の研究¹⁴などを手がけています。これにイギリス農業の研究¹⁵を加えて、三本柱からなる農業史研究をおこなう構想を持っていたんです。

¹² 萩中美枝ほか『日本の食生活全集 48 聞き書 アイヌの食事』（社団法人農山漁村文化協会、1992年）。

¹³ 林善茂「徳川農場発達史」1～3（『北海道大学経済学研究』5・6・13、1954～1957年）など。

¹⁴ 林善茂「鯊漁場の食生活と農耕」（『北海学園大学経済論集』21・4、1974年）など。

¹⁵ 林善茂「近代英国農業の発達形態」（『農経論叢』15、1959年）など。

ですから、世間から「アイヌ研究者」といわれるのは、少々心外なんです。いえ、息子のいうように、アイヌ農耕に関する著書しか纏めていませんから、しかたがないのかもしれませんが、私の研究に対するスタンスは、いま言った通りです。

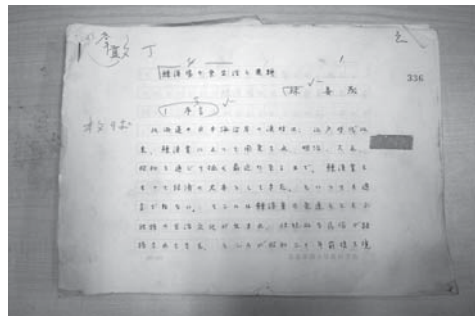


写真 1 林善茂直筆原稿

北海学園大学経済学会刊行『経済論集』第 21 巻第 4 号(1974 年 3 月)に寄稿した「鯨漁場の食生活と農耕」の直筆原稿(同学会 200 字詰 B5 判原稿用紙にブルーブラックペン書)。同誌は近世北海道経済史を専攻し、北大農経助手を長く務めた南鉄蔵教授の退職記念号。

「コタン」を歩いて

フィールド調査の思い出ですか。もう遠い昔のことなので、具体的なことは忘れてしまいましたが、平取の二谷文次郎さんには、いろいろと教えてもらいました。そう

そう、先日亡くなった萱野茂くんと、よく話しましたね。彼がモノを書くようになる前のことです。先ほども言いましたが、萱野くんはおばあさんに育てられたこともあって、私より年下なのに、よくアイヌの古い生活を知っている若者でした。

萱野くんには、後日わたしが経済学部長を務めているときに、アイヌ解放運動の活動家〔アイヌ解放同盟代表・結城庄治氏(1938～83)〕から抗議された際、仲介に入ってもらったことがあります¹⁶。この抗議がきっかけで学部長を退いた¹⁷のですから苦い思い出ですが、萱野くんとの友情はフィールド調査以来のものだったのです。

民具ですか。そうですね、農具を中心に計測・撮影しましたが、収集したものもありました。もう使われなくなっていた古い臼とか杵やサラニブとかが有難いのですから、地元の人は怪訝そうな感じでした。一度、二風谷から大きな臼を引っ張ってきたことがありましたが、かなり面白がられたものです。こうした農具の使用法を、実測や聞き取りに基づきその時代的変遷を含めて具体的に研究したのは訳があります。具体的な実証に基づかない論は、えてして空中戦に陥りやすく、あまり好きではなかったからです。講座の先輩から理論的な指摘を受けても、モノに基づいた実証があれば強い。私の

¹⁶1977 年 12 月～78 年 1 月に起きた、いわゆる「北海道大学差別講義糾弾闘争」。結城氏は善茂氏の講義にアイヌ差別に基づく内容が含まれていたとして糾弾、経済学部前にテントを張り抗議の意思を示した。善茂氏の依頼に応じ、萱野氏が仲介に入り、テントは撤去され、1 月 22 日の公開回答の場で善茂氏が「反省」の意を表して和解した(1978 年 1 月 23 日付『北海道新聞』朝刊)。この事件に関しては、結城庄治遺稿『チャランケ』(草風館、1997 年)第 7 章第 2 節「北大経済学部長糾弾」・同第 8 章「チャランケ」に結城氏側の総括があり(176～234 頁、初出 1980 年)、『北大百二十五年史』通説編(北海道大学、2003 年)第 2 部経済学研究科・経済学部第 3 章「大学紛争と経済学部」(佐々木隆生執筆)に経済学部側の総括がある(433～434 頁)。

¹⁷経済学部長就任は 1976 年 4 月 1 日、退任は翌 77 年 8 月 15 日。この間、善茂氏が担当した 77 年度経済学部開講科目「北海道経済史」の内容を「差別講義」とする解放同盟や学生の抗議があり、同年 7 月 9 日の講義終了後に抗議のためロックアウトを敢行した学生を排除すべく経済学部教授会が警官隊を導入、抵抗した学生が逮捕されるという事態が生じている(1977 年 7 月 10 日付『北海道新聞』朝刊)。

研究報告は、いつも何か現物を提示するものだから、ずいぶん喜ばれたものでしたよ。

これらの農具や作物標本などは、北大を退官する際、北海道開拓記念館に収めました。あの博物館は、立ち上げのときに関わりましたが、国立の歴史民俗博物館や民族学博物館のような大学に準ずる研究博物館にできなかったのが悔やまれます。でも、あそのコレクションはいいものが揃っていて、私なんかも踏鋤の比較研究をしたくらいです。道立の唯一の総合博物館として、研究機能をより充実させていってほしいものです。

当時の調査の記録ですか……。手帳やノート類は確かにあったのですが、自分の研究のためのメモでしょ。研究として纏めてしまうと、それでひと段落、というタイプなんです、わたしは。南七条の家からこの西岡の家に引っ越すときに処分してしまったんだと思います。

民族学

わたしが世間から「アイヌ研究者」と呼ばれるのは、民族学系の雑誌に論文が多く載ったからかもしれません。初めて中央の雑誌に掲載されたのは「臼・杵・箕」という論文¹⁸で、伝統農法の変化を農具の形態・機能の変遷に象徴させ、農学的視点を加味してまとめたものです。これは最初、柳田国男先生¹⁹のやってらした『民間伝承』という雑誌²⁰に掲載される予定で送ったのですが、蓋をあけてみれば何故か日本民族学会の出している『民族学研究』誌に掲載されていた。内容が民族学っぽいということで、回されたんですな。いまでは考えられませんが、当時はそういうことがあったのです。

日本民族学会では仲良しの大林太良²¹くんが雑誌編集を担当していたこともあって、それからちょくちょく原稿依頼がくる。こちらはフィールドの成果を纏めて論文を送る。そうして、『民族学研究』の常連のようなかたちになった（付表2）。まあ、中央の学会誌から依頼されて書いた論文が評価されたわけですから、いま考えればありがたいことでした。そうこうしているうちに、北大では高倉先生と私と、それから文学部の知里真志保先生²²、医学部の児玉作左衛門先生²³あたりが、民族学会における北方文化グルー

¹⁸ 林善茂「アイヌの臼・杵・箕」（『季刊民族学研究』第15巻第3-4号、1951年）。「資料と通信」欄に「著者は日本民族学協会会員」として掲載。

¹⁹ 1875～1962。農政学、民俗学。貴族院書記官長、枢密顧問官、國學院大学教授などを歴任。日本民俗学の創始者として知られる。著書に『遠野物語』、『海上の道』など。

²⁰ 柳田が1935年に結成した民間伝承の会の機関誌。1983年まで通算324号を刊行。1949年から1952年までは日本民俗学会（会長は柳田）が刊行していた。

²¹ 1929～2001。民族学、比較神話学。東京大学教授、道立北方民族博物館長などを歴任。著書に『神話学入門』、『北方の民族と文化』など。

²² 1909～1961。言語学、アイヌ語・アイヌ文化研究。東京帝国大学文学部卒。樺太庁立豊原高等女学校教諭等を歴任後、1943年から北海道帝国大学北方文化研究室嘱託。1949年北海道大学法文学部講師、のち文学部教授。1959～61年、北方文化研究室委員。著書に『分類アイヌ語辞典』など。

²³ 1895～1970。解剖学・形質人類学、アイヌ文化研究。東北帝国大学医学部卒。1929年北海道帝国大学医学部教授、1955年退官。1937年～1955年、北方文化研究室委員。著書に『モロロ貝塚』など。

プと目されるようになったのです。私の著書『アイヌの農耕文化』は、こうした成果を纏めたものですから、民俗学系の出版社から刊行されたのでした²⁴。

北方文化研究ということでいえば、北大には戦前から北方文化研究室があつて、そこがいまでいう学際的な研究センターとしての機能を果たしていました。そうですか、もうなくなってしまったのですか、残念ですね²⁵。わたしもそこに出入りし、昭和34年（1959）からは運営委員をしていましたから²⁶、高倉先生はもちろん、犬飼哲夫先生²⁷、知里先生、児玉先生、伊藤昌一先生²⁸、大場利夫先生²⁹らと日常的な交流の場を持てたのは、研究上有益でした。一度知里先生にアイヌの農業に関する質問をしたところ、自分では詳しく分からないから、と胆振幌別の御父上³⁰を紹介していただいたことがありました。早速参上し、ご両親にお会いし、疑問に答えていただきました。知里先生は河野広道先生³¹との論争が有名なように³²、学問的に大変厳しい方で、わたしの研究を公の場で批判されたこともあったようですが³³、一度胸襟を開いて話し合った後は、大変親切にしてくれましたよ。

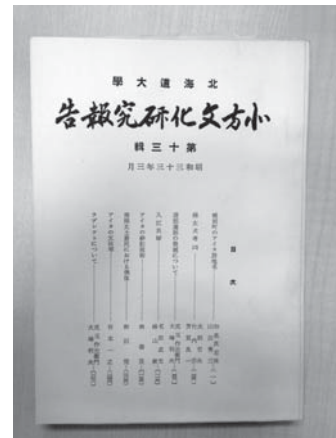


写真2 『北方文化研究報告』第13輯表紙(1958年3月刊行)
善茂氏とともに、知里真志保・山田秀三・犬飼哲夫・児玉作左衛門・大場利夫・名取武光・和田完・谷本一之といった名前がみえる。こうした北方文化研究室の学際的な環境のなかで、善茂氏の研究は進められたことがわかる。

²⁴ 東京の慶友社から「考古民俗叢書4」として1969年に刊行。

²⁵ 1937年北方文化研究室設置、66年に文学部附属ユーラシア文化研究室と合併し文学部附属北方文化研究施設発足、95年廃止。

²⁶ 1959～66年、北方文化研究室委員。67～85年、文学部附属北方文化研究施設研究員。

²⁷ 1897～1989。動物学、アイヌ文化研究。北海道帝国大学農学部卒。同助手・助教授・教授。この間同博物館主任、函館水産専門学校校長を務め、理学部教授を兼任。1937～47年・49～61年、北方文化研究室委員。1961年退官後、酪農学園大学教授、北海道開拓記念館長など。著書に『北の風土と動物』など。

²⁸ 1907～1982。解剖学・形質人類学、アイヌ文化研究。東北帝国大学医学部卒。1931年北海道帝国大学医学部助手。のち同助教授、教授。この間、同大教養部長を務める。1971年退官。1937～59年北方文化研究室研究員、59～66年同委員。著書に『解剖学概要』など。

²⁹ 1913～2007。解剖学、考古学。1929年北海道帝国大学医学部雇。のち同講師等を経て1966年文学部附属北方文化研究施設教授。この間1959～66年北方文化研究室委員。1976年退官後、札幌商科大学（のち札幌学院大学と改称）教授。著書に『北海道の先史文化』など。

³⁰ 知里高吉氏（1884～1961）。

³¹ 1905～1963。昆虫学、考古学。北海道帝国大学農学部卒。同助手、講師。1944年退官後、北海道新聞社参事等を経て、1955年北海道学芸大学札幌分校教授。著書に『北方昆虫記』、『北方文化の主潮』など。

³² たとえば、知里真志保『アイヌ語入門：とくに地名研究者のために』（楡書房、1956年／のち北海道出版企画センターが1985年に復刻版刊行）第1章第6節を参照のこと。

³³ 知里真志保「原始農業の呪術的性格」（『北方研究』1、1952年／のち『知里真志保著作集』第3巻、平凡社、1973年に所収）に、「従来アイヌの農業に就ては技術的な面からのみその原始性が注意され、呪術的な面に触れた研究は殆ど無い様である。しかしながら原始農業の本質的な性格は寧ろ呪術的な面に於てこそ捕えることができるのではなかろうか」とある。

こうした人びとが中心になって、昭和37年(1962)にアイヌ文化保存対策協議会が立ち上げられ、道庁の手によりアイヌ民俗資料調査が実施され、のちにこの成果が『アイヌ民族誌』に結実します³⁴。私も採集農耕や食生活の面を分担しました。『アイヌ民族誌』の成果は、後世に残り得るものと自負しています。先ほども申しましたように、昭和30年代が伝統的なアイヌの生活を知る人がお元気だった最後の時代だったと思うからです。これからアイヌの民族学を学ぶ人は、こうした聞き書きができないので大変だと思いますね。しかし、逆に視点を広く持って、考古学の成果などを取り入れながら、世界史的な視野でもって研究すればよいのではないのでしょうか。わたしはアイヌ文化の南方的要素を重視する結論を導き出しましたが、北方アジアとの比較の視点も欠かせません。そうした研究がなされることを期待しています。

高倉先生と北海道史

わたしの研究にとって、やはり高倉新一郎先生の存在を抜きに考えることはできません。研究上の学恩は勿論ですが、所属講座〔農学部農業経済学講座→経済学部経済史講座〕では先生が教授、私が助教授であり、直属の上司でもありました。「助教授」とは「教授」を助ける、と書きますでしょ。わたしは昭和23年(1948)に農学部助教授に昇任し、28年に経済学部に移りますが、38年に教授に昇任するまで、講座の高倉教授を助ける立場と心得ていました。ただ、先生自身は後に農学部に戻っちゃうんですが〔昭和37年4月〕、経済学部にもそのままおられれば文系学部からの支持によって総長に選出されたのではないかと今でも考えることがあります。

高倉先生は温厚な人柄で、人をまとめるのが大変うまく、社会的な活動にも積極的な方でした。研究も農学の枠を超えて幅広く、まさに北海道史の生き字引という方です。そういうこともあって、道庁の仕事や市町村史の仕事などを常に抱えておられ、大きな仕事は自然と講座で請け負うかたちになり、私などもお手伝いすることになるため、非常に忙しかった。早く帰ることのできる他の講座がうらやましく思ったほどでね。家族には迷惑をかけたと思っています。新北海道史³⁵や北海道警察史³⁶の仕事は、高倉先生



写真3 林善茂宛『アイヌ民族誌』
発送郵便小包外装(1969年3月)
1969年3月刊行初版本(1500部限定、上下2冊本)の郵送に用いられた箱装表書(23.5×31.0 cm)。下部のラベルにはシリアルナンバーが振られており、執筆者である善茂氏には9番めの本が発送されている。

³⁴ 1969年にアイヌ文化保存対策協議会編、児玉作左衛門・犬飼哲夫・高倉新一郎監修で東京の第一法規から刊行。

³⁵ 1963年から81年まで高倉新一郎を編集長として北海道庁により実施された自治体史編纂事業。概説1巻、通説5巻、史料2巻、年表1巻からなる。善茂氏は編集員として一貫して編纂に従事し、とくに通説1・5の構成・編集の責任を負った。

³⁶ 1966年から68年まで高倉新一郎・林善茂・渡辺茂を編集顧問に委嘱し北海道警察本部によ

とのつながりの中で引き受けた仕事です。わたしはこうして引き受けた仕事は、なるべく高倉先生の筆致に合わせて叙述しようと心掛けましてね、一度など、あのけしからん部分は林が書いたに相違ない、と批判された一節が、実は高倉先生の執筆箇所だった、なんてことがあったほどです。面白いもので、同じような研究をしていると風貌までが似てくるようで、東京の学会で高倉先生に間違えられて挨拶されたこともありましたよ。

ただ、北海道史に関する外部の研究会には、わたしはほとんど出ませんでしたね。別に出なくても、高倉先生には大学でいつもお会いできるわけです。いえ、実際のところ忙しかったし、実のところ、高倉先生の周囲に集まって市町村史を編纂している方々に学問的魅力を感じなかったからでもありました。公職を多く兼務し、社会的活動を精力的にこなされ、北海道史に力を注がれる先生の研究スタイルは、あくまでも農学に立脚した研究を進めていこうとしたわたしのそれとは、若干異なる点があったことも事実でしょう。

しかし、アイヌの農耕という研究テーマを示唆して下さったのは高倉先生ですし、北方文化に関する文献の解釈について議論してくださったのも先生です。自分の研究について意見をぶつける相手はいつも先生だったわけで、その水準をクリアすれば私としては満足でしたし、それは間違っていないでした。

わたしは昭和 60 年（1985）の定年退官後、名古屋へ職を転じました³⁷が、その後も電話などで高倉先生とディスカッションするのが何よりも楽しみでした。江戸時代の宗教を専攻している息子は嫌がりますが、名古屋へ移ってからわたしは豊臣秀吉の外征について調べたことがあります。秀吉の外征の動機について先生に意見を伺ったところ、凡夫に英傑の気持ち分らずだよ、と暗に心象の実証の難しさを指摘されたように思います。このように、どんな意見にでも、すぐに的確な答えを返してくれる先生でした。やはりよい先生にめぐりあえたことで、よい仕事ができただと思いますね。

【了】

はやし・よしげ 1922～2013. 小樽市生まれ。北海道大学名誉教授。農学博士（北海道大学）。勲二等瑞宝章。北海道帝国大学農学部卒業。同大農学部助手、助教授、経済学部助教授、教授。この間、同大評議員、経済学部長を歴任。1985 年退官後、名古屋商科大学教授。主著『アイヌの農耕文化』、『アイヌ民族誌』（共著）、『新北海道史』（共編著）³⁸。

り実施された警察史編纂事業。2 巻からなる。善茂氏は一貫して原稿を校閲した。1999 年に続編 1 巻が刊行。

³⁷ 1985 年 4 月から 94 年（平成 6）3 月まで名古屋商科大学教授（一般経済史）。

³⁸ 履歴については、北海道大学経済学部『経済学研究』34・4（林善茂教授退官記念号、1985 年）ならびに井上高聡「林善茂関係資料」（『北海道大学大学文書館年報』5、2010 年）に記載がある。

付表1:『北方文化研究報告』・『北方文化研究』掲載の林善茂論文一覧

掲載誌・号数	掲載年	論文名
北方文化研究報告 13	1958 年	「アイヌの耕耘技術」
北方文化研究報告 14	1959 年	「アイヌの収穫・貯蔵技術」
北方文化研究報告 15	1960 年	「アイヌの播種技術と栽培作物」
北方文化研究報告 16	1961 年	「アイヌの脱穀調製技術」
北方文化研究報告 17	1962 年	「アイヌ農業の経営形態」
北方文化研究報告 18	1963 年	「アイヌ農業の特質と技術段階—本邦焼畑農業との比較—」
北方文化研究報告 20	1965 年	「アイヌの食生活」
北方文化研究 2	1967 年	「アイヌの食料植物採集」
北方文化研究 10	1976 年	「アタネ（アイヌ蕪）考」

付表2:『民族学研究』掲載の林善茂論文一覧

巻号	掲載年月	論文名
15 巻第 3・4 号	1951 年 3 月	「アイヌの臼・杵・箕」
16 巻第 1 号	1951 年 8 月	「竪杵の変遷」
16 巻第 2 号	1951 年 11 月	「竪杵の変遷 2」
16 巻第 2 号	1951 年 11 月	「イチャセイ考」
18 巻第 4 号	1954 年 12 月	「アイヌの土地占有慣行：クイタイペを中心として」
20 巻第 3・4 号	1956 年 12 月	「アイヌの作物管理」
25 巻第 1・2 号	1961 年 3 月	「アイヌの農作物利用」
29 巻第 3 号	1965 年 1 月	「アイヌの農耕文化の起源」
36 巻第 3 号	1971 年 12 月	「アタネ（アイヌ蕪）の栽培と利用」
44 巻第 1 号	1979 年 6 月	「北海道の踏鋤と踏鋤農法」

Document on The Memories of Ainu Agricultural Studies
by Dr. Yoshishige HAYASHI:1950-1980

edited by Akihisa TANIMOTO

Hokkaido University

Dr. Yoshishige Hayashi (1922-2013) is an agricultural economic history researcher who had taught at Hokkaido University for a long time. His area of research is traditional agricultural culture of the Ainu. He is well known for his detailed field work conducted from the 1950s to the 1960s on Ainu society across Hokkaido. Also known for his research style which is heavily influenced by the interdisciplinary method of study at the Research Institute for Northern Culture, he was engaged in the compilation of Hokkaido history along with Dr.Shin-ichiro Takakura. This transcript, which is a recollection of research activities conducted by Dr. Hayashi in 2006, is arguably a valuable record that recounts in detail a side of Ainu and the northern culture studies developed out of Hokkaido University between the 1950s and 1980s.